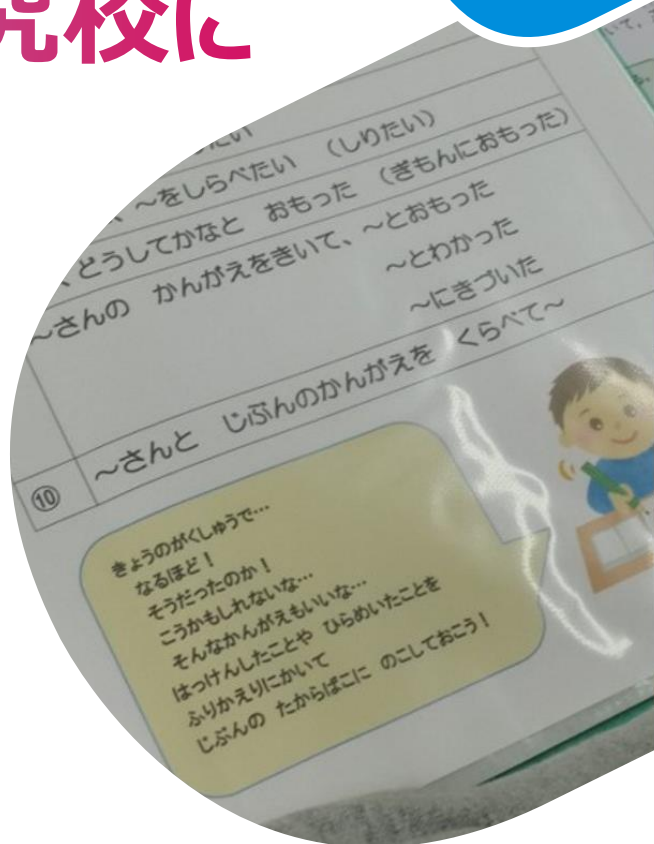


これからの時代に求められる資質・能力を育むための
カリキュラム・マネジメントの在り方に関する調査研究事業

令和3年度調査研究校に おける研究のまとめ



令和3年度 調査研究校と各校のテーマ

A 学校の教育目標等（めざす児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究

① 富田林市立小金台小学校

「『今と未来、社会で生きる自分らしさを』～小金色の深い学びをめざして」

B 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

② 四條畷市立忍ヶ丘小学校

「めざす子ども像の実現に向けた『書くこと』を起点とした教科横断的な学びの研究」

③ 忠岡町立東忠岡小学校

「学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

学校教育目標の実現をめざして —ICTを活用して取組みをつなぐ— 」

C 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

④ 田尻町立中学校

「SDGs TO TAJIRI 学校×役場・地域連携

総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメント」



令和3年度 カリキュラム・マネジメント調査研究事業を 実施するにあたって大切にしたいこと

- ① 無意識にやっていることも言語化することが大切
自校では当たり前なのが、他ではそうでないことも…
- ② 「カリマネとは何か」という定義の再確認（→）
特に、“3つの側面”を通して、「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと」を意識して、学校経営や生徒指導の視点など、広い観点で取り組みを進めていく
- ③ ICTの活用…発達段階やねらいに応じて
- ④ 他の公立学校にとって参考になるような成果を示してほしい。学習指導要領との関係を意識して手引きをまとめていくこと

4 各学校においては、児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

（小学校学習指導要領 第1章 総則 第1の4）

カリキュラム・マネジメントの実現に向けた 年間スケジュール例を作成

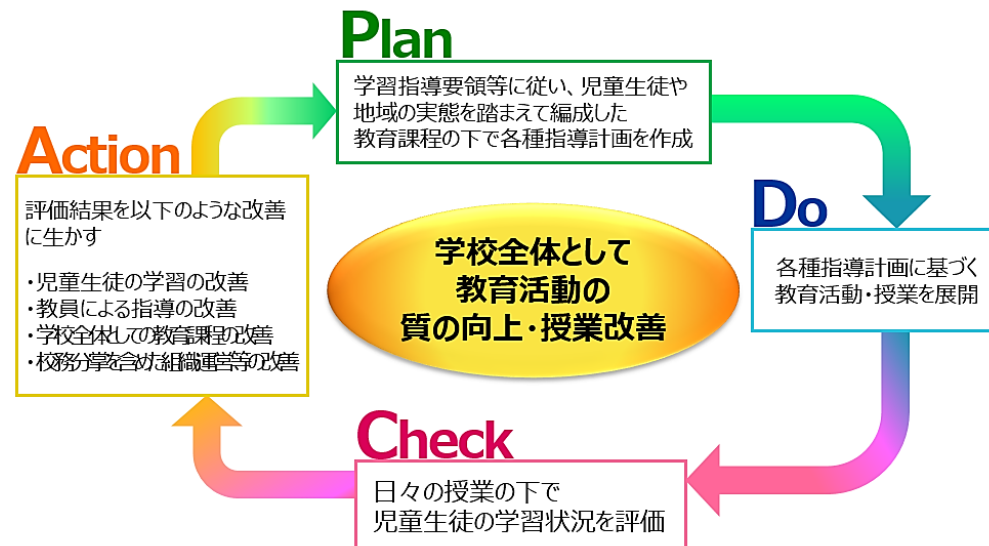
1. 「カリキュラム・マネジメントの実現に向けた年間スケジュール例」(予定も含む)について

月	No.	内容	対象	PDCA	成果・課題	関連性
前年度 3月まで	1	・年度末反省 【校内研究結果の共有と次年度の取組み】	全校職員	A Ref	○年度で途切れないスムーズな移行が図れた。4月からの教職員が変わってもすぐにスタートできるようになった。 ●この時点ではカリキュラムマネジメントの話はできていなかった。	同意形成 1.3,6,40,41,42,43
	2	・打ち合わせ【学校長のビジョンと市教委のビジョンの共有「3年後をイメージ」】	校長、市教委	A An	○学校長のプランと市教委のねらいが共有できた。	事前打合せ 2,4,5,12,29,44
	3	・研究紀要の作成と配布	全教職員	A Act	○研究の取組み成果と課題を転任者にも4月に周知できている。	同意形成 1,3,6,40,41,42,43
春休み中	4	・打ち合わせ(目標と取組概要の共有)	校長、担当者、市教委	P An	○担当者の役割を明確にできた。 ●具体策のイメージは持てなかった。	事前打合せ 2,4,5,12,29,44
	5	・作戦会議(めざす子ども像の見直し、国語科を中心とした教科横断的な取組みにつなげるために、校内研究の方向性を共有)	校長、担当者、学担、市教委	P An	○学校全体の取組みとなるように研究部長と担当者が同輪となり、役割分担ができた。 ●校内研究とカリマネの位置づけが難しかった	事前打合せ 2,4,5,12,29,44
4	6	・学校経営方針(ビジョンの共有)	全教職員	P Act	○今年度の学校目標、めざす子ども像と研究方針を共有	同意形成 1,3,6,40,41,42,43
	7	・年間指導計画作成	各学年教職員	P Act	○年間指導計画を立てた ●昨年度の踏襲になりがち	指導計画見直し 7,8
	8	・分類表作成と取組の実施 ・教科横断的な計画表(1学期分)を作成	全教職員 各学年	D Act	○教育活動全体で「説明力、理由力、感応力」を意識した指導につながった。	指導計画見直し 7,8
	9	・通信①「カリマネってなんだ」	全教職員	A Act	○担当者から教職員にわかりやすい説明ができた。 ●取組み具体はまだ見えにくい	研修・通信 9,16,20,22,31,32,36,38,45
	10	・全国標準学力検査	4~6年生児童	C Ref	○これまでの成果を図る	定量的評価 10,11,18,19,24,25
5	11	・全国学力学習状況調査、すくすくウオッチ	5, 6年生	C Ref	○これまでの成果を図る	定量的評価 10,11,18,19,24,25
	12	・打ち合わせ(めざす子ども像から、今年度の指標とする具体的な子どもの姿を引き出すための方策を共有【しかけシート等の検討】)	校長、担当者、市教委	P An	○校内研で全教職員にわかりやすい提案ができるよう意識できた。 ●具体的な子どもの姿の共有が難しいことが分かった	事前打合せ 2,4,5,12,29,44
	13	・児童アンケート前期(市、学校)	4~6年生児童	C Act	●学校独自のアンケートでは大きな変化が見られず、見直しが必要だと感じた。	定性的評価 13,14,15,34,35,37,39
	14	・教職員アンケート前期(市)	教職員	C Act	○現状値の把握、昨年度からの変容をつかむ	定性的評価 13,14,15,34,35,37,39
	15	・カリマネアンケート前期	全教職員	C Ref	○教職員の取組み指標が取れた。	定性的評価 13,14,15,34,35,37,39

夏休みの期間を使って、各調査研究校が年間のスケジュールを一覧にまとめ、どの時期に、誰を対象にどのような取組みをし、それが後のどんな取組みにつながっているのかを見える化した。

PDCAサイクルの中で、どの部分にあたるのかが明確になり、これまでの取組みで何が効果的で、どんなところに課題があったのかを見える化でき、各調査研究校の後半の取組みの改善につながった。

また、年度末には、今年度の取組みをふり返り、成果と課題についてまとめ、各校の次年度の取組みの計画に生かした。



各校の年間スケジュール例は二次元コードよりダウンロードできます

富田林市立小金台小学校

『今と未来、社会で生きる自分らしさを』 ～小金色の深い学びをめざして

隣接する中学校と、新たに令和4年度より小中一貫校になるにあたり、これまで校区で共通理解を図ってきた「めざす子ども像」を見直し、『今と未来、社会でいきる自分らしさを』とした。「つきたい力」を構造化し、新たな教科等横断的な学びのためのカリキュラムの作成について、生活科や総合的な学習の時間を核にした「未来科」として研究を進めることにした。



1. 「つきたい力」の構造化

「めざす子ども像」を実現するため、9年間を通じて段階的・系統的に育成する「つきたい力」を明確にして構造化し、その育成に向けた方策の具現化を図り、各学年に応じた指導を行う必要があった。学力プロジェクトチームの担当者が、児童生徒の実態、教職員の願い、新学習指導要領の理念、教科領域横断的な視点、小・中学校それぞれの授業実態、両校の研修テーマ等を踏まえ、検討を重ねて子どもに「つきたい力」を次の4つの柱で整理した。

- I とりいれる力
- II カタチにする力
- III 伝え合う力
- IV 今を生きる力

上記の「4つの柱」ごとに具体的な内容項目を挙げ、さらに前・中・後期別に区分して配列した「構造表」(案)(下図)を作成した。夏季休業期間中に実施した小中合同研修において全職員で検討を行い、授業の中で、具体的にどのように学習活動と結びつかをイメージしながら、前期・中期・後期ごとに話し合いを行い、今後の小・中学校の授業で活用して検証するよう共通理解を図った。

	前期	中期	後期
とりたい力	きく よむ	わかる	ふかく
カタチにする力	みとおす えらぶ くみだてる しあげる	わくわく わかる	じっくり なぜを つかむ
伝えあう力	はなす	できる	えがく
今を生きる力	かく みつめる つなげる	じっくり なぜを つかむ	ひろく ふかく えがく

▲前期(小1~4年)、中期(小5~中1)、後期(中2~3)の3つの期別に「つきたい力」を整理していった。

2. 国語科を中心にした言語能力育成の取組みと系統的な指導計画の作成

国語科の授業研究においても、言語能力の育成について、先述した構造図と関連させながら取組み、常に子どもたちにつきたい力の系統を確認しながら研究を進めた。このことで、単元計画を作成する際も単元のゴール(つきたい力)から逆算して、指導計画が作成されるようになり、必然的に指導と評価の一体化が図られるようになった。

さらには、子どもたちの学びを支えるツールとしてタブレットが有効活用され、思考ツールの使用が一般化したことも成果の一つである。

今年度は、国語科を核として実践し、研究を進めてきたが、今後、どの教科においても「つきたい力」を意識するとともに、各教科領域における言語活動を整理・分析し、国語科で図っている言語活動の充実と関連付けて、すべての教科領域を通じて言語能力の向上をめざしていく必要があることを再度全職員で確認をする必要がある。

9年間の構造図

	前期 (小1~小4)	中期 (小5~中1)	後期 (中2~中3)
とりたい力	きく よむ	わかる	ふかく
カタチにする力	みとおす えらぶ くみだてる しあげる	わくわく わかる	じっくり なぜを つかむ
伝えあう力	はなす	できる	えがく
今を生きる力	かく みつめる つなげる	じっくり なぜを つかむ	ひろく ふかく えがく

▲構造図が細分化されすぎたため、文言を簡略化し、焦点化した構造図を作成した。

3. 「未来科」の創設

小中一貫校でめざす子ども像の具現化のため、生活科・総合的な学習の時間等のカリキュラムを再構築し、今日的な社会課題(SDGs、キャリア教育等)を踏まえたこれからの「生き方」を9年間で追究していく新たな学びのためのカリキュラムの作成について、その呼称を「未来科」として研究を進めた。

「未来科」においてもまずは、つけさせたい力を集約することから骨格作りをすすめた。新教科の設置というよりは、「未来科」はあくまでも既存の生活科、総合的な学習の時間の再構築であり、これまでの取組みを検証し、めざす子ども像の具現化に有効なものを系統化していくことを目的とした。

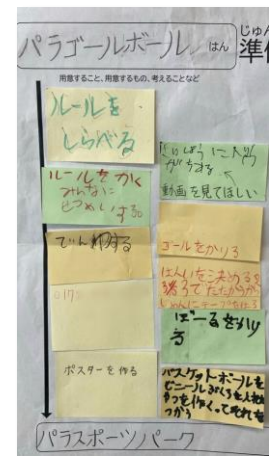
小単元名	学習活動	つきたい力
つみける つかむ	課題設定 (1) パラリンピックについて調べよう、体験しよう!	とりたい力
パラスポーツを知ろう やってみよう! (1.2)	情報の収集 (8) パラスポーツのことを調べたり体験したりしよう。パラスポーツをしている人やパラリンピック出場選手の話聞く。パラスポーツ選手の普段の生活(車いすやアイマスクなど)を体験する。 整理・分析 (2) わかったことや良さ、課題、自分の考えを見い出す。 まとめ・表現 (1) わかったことや良さ、課題、自分の考えをまとめ、友だちに伝えよう。	カタチにする力 伝え合う力 今を生きる力
ふかめる	課題設定 (1) 学んだことをいかして、いろいろな立場の人々、誰もが安心して活動できるクラスや学校にするため、自分たちができることを考えよう。 情報の収集 (4) スポーツ班 サポート班 誰もが楽しめるスポーツの方法やルールを調べ、サポートや工夫について調べる。体験する。インタビューする。アンケートをする。	とりたい力 カタチにする力
「誰もがスマイル!」 をつくらう! やってみよう!	情報の収集 (8) 集めた情報をもとに、誰もが楽しめるスポーツのルールや工夫を考える。 まとめ・表現 (3) 友だちに伝え、やってみよう。よりよい案にするためにアドバイスしよう。再度自分たちで練習直し、改善する。	伝え合う力 今を生きる力
いやす	課題設定 (4) 誰もが楽しめるサポートを合わせて「誰もがスマイル!大会」をする。 情報の収集 (2) 「誰もがスマイル!大会」をする。 整理・分析 (2) 参加者の感想を聞いて集めたり、写真を撮ったり、アンケートを取ったりする。大会のふりかえりをして、参加者の感想や様子から、よかったことや改善することについて考える。 まとめ・表現 (2) 自分たちが考え、実施した「誰もがスマイル!」を、他学年や地域、出あった人々に紹介、報告する。	とりたい力 カタチにする力 伝え合う力 今を生きる力

▲4年生の総合的な学習の時間では、障がい理解教育として「やさしくなろう」をテーマに、「パラスポーツパーク」をつくるという取組みを実施した。取組みを計画するにあたって、9年間の構造図を基にして「つきたい力」を明確にすることができた。

4. 今後に向けた展開

「未来科」では、前・中・後期それぞれを総括する活動として、それぞれの期で学んだことを表現し伝える発表やスピーチなどの活動を位置付けたいと考えているが、令和3年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面による異学年交流を行うことが困難な状況があった。令和4年度は、各学年の「未来科」の取組みの中で、中学生が小学生に向けて発表やスピーチを行う活動や、小学生が中学生に意見やアドバイスを求める活動を行うなど、小中一貫教育の機能や特性を活かした活動を行っていきたい。

また、「未来科」は、各教科で育まれた力が発揮される場でもあるため、系統性を持って進めていくためには、「未来科」とつきたい力の構造図、及び各教科との関連を明らかにした、指導計画表を作成する必要がある。



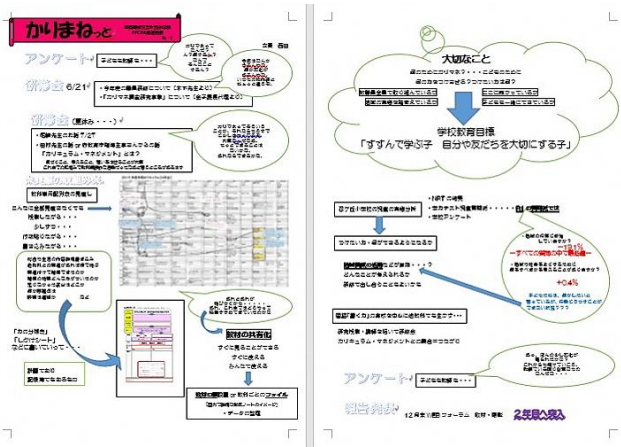
▲グループごとにパラスポーツをするために準備すべきことを意見を出し合って考えた。

四條畷市立忍ヶ丘小学校

めざす子ども像の実現に向けた『書くこと』を起点とした教科横断的な学びの研究

1. カリマネ通信「かりまねっと」の発行

本校がカリマネの事業を受けるにあたり、教職員の基礎的・基本的なカリマネの知識が不足していると感じた。そこで、カリマネの校内研修会に参加する前に、教職員一人ひとりが少しでもカリマネの知識を身につけられるように、自ら学べる様々な方法を記したカリマネ通信第1号を発行した。学習指導要領、カリキュラム・マネジメントの手引き（大阪府教育庁作成）、NITSの動画について簡単な内容と共に記し、教職員が少しでも興味をもって事前学習に取り組めるように工夫した。



第1回のカリマネ校内研修では、「学習指導要領総則から見た児童の実態の考察」というテーマで市教委指導主事から指導助言を行い、校内全体で「めざす子ども像」や「つたい力」について再確認した。その後、右の「しかけシート」の様式を担当者で指導主事から協議して作成し、全校で取り組んだ。

2. 国語科を中心としたカリキュラム・マネジメントの進め方

「カリキュラム・マネジメントの手引き」も参考にしながら、第1回の校内研究では、「めざす子ども像」と「研究テーマ」をつないで考えることや、各学年で「何ができるようにしてほしいのか」ということをすべての教員で考えた。

また、このことを教員が1年間意識し続けることが大切だと考え、1学期に1本の「しかけシート」という簡単な実践報告の提出も呼び掛けた。

しかけシート ①めざす子ども像 ②きたいとおもう ③いかく シート

めざす子ども像	すすんで学ぶ子 自分や友だちを大切にする子	
何ができるようにするか	<ul style="list-style-type: none"> 伝えるために必要な事項をかきだすことができる。 事柄の順序（SW1H、時間、事柄）を考えて書くことができる。 考えや気持ちを理由づけて書くことができる。 	学年で考えた内容
教科横断的に学ぶ	伝えたいことを見つけ、それが明確になるように事柄の順序に沿って書く力	
研究テーマ	自分の思いや考えをわかりやすく伝え合う児童の育成 ～各教科で汎用的に活用できる書く力の向上～	
教科等	国語 1年 算数・生活	
書く力	「生き物のびっくりを見つけて生き物イズ大会しよう」	
単元目標	<ul style="list-style-type: none"> 説明力 問いと答えを整理して書くこと 理由力 説明する事柄を選んで書き出すこと 感懐力 算数：具体的な数量を式にすること 生活：植物の変化や成長をカードに書くこと 	3つの力のうち、どの力なのか
学習メモ	<ul style="list-style-type: none"> 国語「くらげ」 <ul style="list-style-type: none"> 絵と文章の結びつき 挿絵から特徴を見つける（図や絵を読む力） 算数 たし算、ひき算 生活「おはなしの絵」「おはなしづくり」 図や絵を描いて解く 「問いと答え」の関係を捉える 文章問題 国語「おさなご」 生活「はらきそでたわしのはな」 観察記録（観点を決めて書く） かたち おおきさ いろ におい ふとさ かず たかぞ おもさ さわったかんじ 国語や科学読み物で調べる？ 	他教科との関連を考える

3. カリマネに関するアンケート

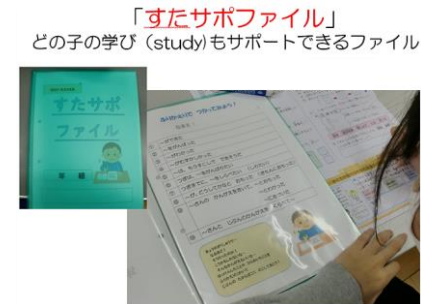
本校の現状を把握するために、カリマネに関する教職員アンケートを6月に実施し、強みと弱みを共有した。

アンケートの結果から把握できた強みは、「新しい実践には前向きに取り組む意欲があること」、「同僚と喜びを共有していること」、「知識や技能、実践内容を同僚と提供しあえていること」等だった。

弱みは、「総合的な学習の時間において探究の過程を意識した指導ができていないこと」、「地域の人材や素材を活用できていないこと」、「年間計画の改善に役立つような記録が残せていないこと」等だった。

4. 「すたサポファイル」を作成

すべての教科で「すたサポファイル」（右下図）を活用することで、こどもの学びを再構築し、豊かな言語活動の実現に向けた、指導計画の見直しができる。2学期後半には、子どもたちから「すたサポファイル」を見ながら学習を進める様子も見られるようになり、自分で学習内容をつかんだり、判断したり、意見交換する場面がとて増えた。



「書く力」に関するものは前から、他教科のものは後ろからファイリングした ▲

5. 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

児童に身につけたい力の育成に向かい、教師集団が一丸となって組織的に取り組めるようになった。授業では、既習事項や系統性を意識して指導できるようになった。（アンケート結果 6月：34.8%⇒12月 **76.5%**）

カリキュラム・マネジメントに関するアンケート結果を見ても、肯定的回答の平均が20ポイントアップした。

次年度に向けての課題は、評価方法の開発や実施について研究を深めることである。各教科で身につけた資質・能力を活用する場面において、教科横断的な視点から、総合的な学習の時間における探究の過程を強く意識した指導が組織的にできるよう、今の取り組みをブラッシュアップしていく。

「すたサポファイル」

- 現状は、
- 先生がつくる
 - 全員統一された資料
 - 先生の指示がないと活用しない
- めざすのは、
- 子どもがつくる、ときには失敗する
 - 個性や違いがある資料
 - もっと使いたくなる「すたサポファイル」！
- ☆すたサポファイルを中心にカリキュラム（子どもの学び）をマネジメントし続けています！

忠岡町立東忠岡小学校

学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究

学校教育目標の実現をめざして—ICTを活用して取組みをつなぐ—

1. なぜ取組みを進める必要があったのか

本校がカリキュラム・マネジメントに取り組むにあたって、まず、課題について児童アンケートや全国学力・学習状況調査の結果等をもとに分析したところ、

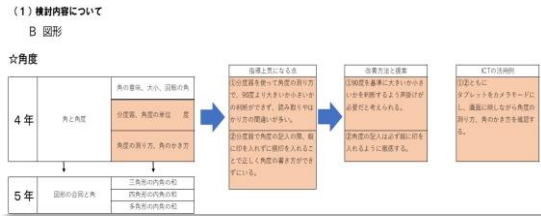
- 根拠をもって自分の考えを表現できる力に課題
- 学年、部会、教科をこえてつながる取組みが必要 (つながりを意識した系統的な取組みが少ない)
- 一人一台端末をより有効に活用することが必要

ということがわかった。これらの課題解決のために、カリマネに学校全体で取り組んで、児童の課題に正対していきたいと考えた。

そこで、「根拠をもって、自分の考えを表現できる力」を育むため、算数を切り口にICTを活用して取組みをつなぎ、カリマネに学校全体で取り組むことにした(下図)。

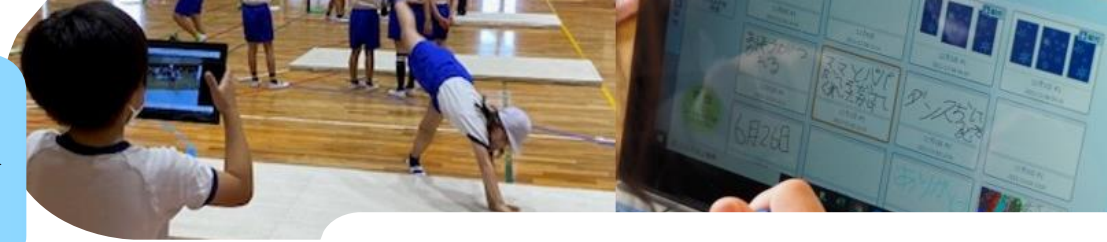
2. 算数科を切り口にした領域別研究

算数の領域を、数と計算、図形、測定・変化と関係、データの活用の4つのグループに分けて研究を進めた。各領域で、学年のつながり、指導上気になる点(つまづきやすい点)、改善方法と提案、そしてICT活用例についてそれぞれ作成した(下図)。



算数で取りまとめた内容のうち、特にICTの活用について、他教科や行事等につなげられるように、年間計画の見直しを行い、単元配列表を作成した(下図)。

児童が「根拠をもって自分の考えを表現できる力」を身に付けられるようにするため、①算数科を切り口に、ICTを活用した授業実践を蓄積すること、②各学年、各部、各教科等の取組みをつなげること(年間計画の見直し)の二本柱で取組みを進めることにした。



3. 児童会の取組みをヒントに...

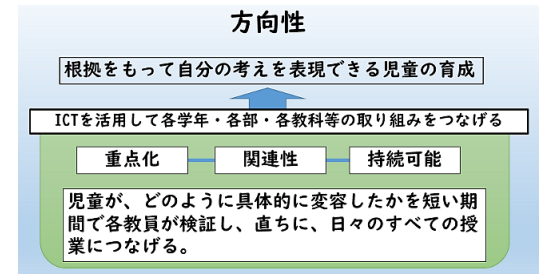
授業でのICT機器の活用方法やねらいなどを記入するシートを作成し、活用事例を蓄積していこうとしたが、様式に入力する時間がかかってしまい、思っていたほど効果的なものにはならなかった。

12月に児童会活動で行っていた、子どもたち同士がふせんにメッセージを書いて貼る「元気玉」という取組みからヒントを得て、職員室に「ICT活用掲示板」(右下図)を設置することになった。

ふせんにICTを活用して「よかった点」や「困った点」を書いて貼っていくと、教職員同士でICTの効果的な活用についてコミュニケーションをとる場面が増え、好事例や課題が蓄積されていった。掲示板を参考に、他学年の先生が授業に取り入れるなど、学年を超えた取組みのつながりも生まれた。

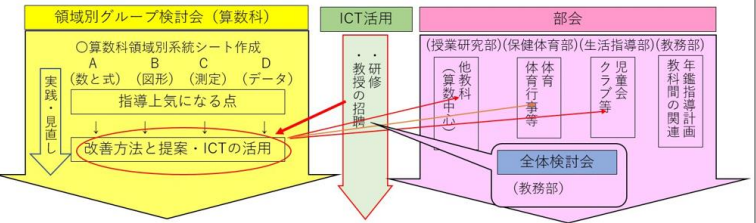
4. 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

ICTの活用について、情報共有するなかで、ICTを活用することが目的となっている場面がまだまだ残っていることが明らかになってきた。令和4年度は、子どもにつけたい力に正対した教科横断的な取組みを重点化し、ICTを活用する際には、それぞれの学年の発達段階に応じた活用を研究し授業改善につなげていきたい。そのためにも、PDCAサイクルのC(評価、検証)やA(実践)により重きを置き、短時間でのC・Aの回数を積み重ねていくことが重要であると考えます。



東忠岡小学校 カリキュラムマネジメント実施計画 (イメージ図)

テーマ ICTを活用して、各学年・各部・各教科等の取組をつなげる



【学校教育目標】 よく学ぶ子・心豊かな子・元気な子の育成をめざす

1. 児童の課題 「根拠にもとづき自分の考えを表現する力」
2. 組織の課題 「各学年・各部・各教科のよりつながりのある取組み」

9月	10月	11月
活動の充実 コンピュータ一斉の利用 ホームページ 算数学習 算数活動 教材の活用	サイマル活動への取り組み 算数指導 算数指導 算数指導 算数指導 算数指導	算数の計算 算数の計算 算数の計算 算数の計算 算数の計算
算数の活用 算数の活用 算数の活用 算数の活用 算数の活用	算数の活用 算数の活用 算数の活用 算数の活用 算数の活用	算数の活用 算数の活用 算数の活用 算数の活用 算数の活用

▲線で結んでいく単元配列表とやっていることは同じだが、色分けすることで視覚的にわかりやすくなった。

←事例を収集するための様式は、データを蓄積するために効果的だが、日常的な好事例の交流には不向きだった。

次年度に向け情報を整理して、さらに効果的にICTの活用が進むようにマネジメントしていく。→



田尻町立中学校

SDGs TO TAJIRI 学校×役場・地域連携 総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメント

1. 生徒の課題の分析と目標設定

本校がカリマネを進めるにあたり、生徒の課題を分析し、「自ら課題を見つけ、解決に取り組む力」と「初めての環境や相手でも自分の考えをうまく伝えられる力」を身につけさせたいと考え、子どもたちの「社会的実践力の育成」を目標にした。

中学生が、地域や役場の各課と意見を交流し、SDGsの観点から田尻町が抱える現代的な諸課題について解決していくという取組みを実施するために、総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントを行った。その際、

①地域人材の活用、②教科横断的な視点の2つを軸に取組みを進めていった。

中学生が、地域や役場の各課と意見を交流し、SDGsの観点から田尻町が抱える現代的な諸課題について、「1.自分たちに何ができるか。」「2.学校全体で何ができるか。」「3.地域・役場と連携・協力して何ができるか。」という3つの視点で解決に向けて、企画・立案・提案し、実践していくことになった。



2. 子どもたちの想いを大切にしたい 好循環のサイクル

「1.自分たちに何ができるか。」「2.学校全体で何ができるか。」「3.地域・役場と連携・協力して何ができるか。」という3つの視点で課題解決に向けて、企画・立案・提案し、実践していった。その際、子どもたちが町のためにできることを考えた「想い」を大切にスタートした。

自分たちの想いを実現するために子ども同士で協力し合ったり、企画したりする中で、さまざまな地域人材と関わりながら、時には失敗や挫折を経験しつつも、行動し続けた。

ものごとを成し遂げることの楽しさややりがいを実感でき、そこで感じた感動や、もっと頑張りたいという意欲が次の取組みにつながり、「好循環のサイクル」となっていた。

3. 教科横断的な視点を普段の授業から大切にする

子どもたちが各グループで企画・提案したものについて、教員に向けたプレゼンテーションを実施した。教員は、各教科の視点から生徒に指導を行った。その内容は、各教科の学習指導要領に基づいた内容であることはもちろん、子どもたちに「つきたい力」を意識した授業づくりにもつなげていった。

例えば、国語科の「説得力のある提案をしよう」という単元を学習する際、数学科の教員が「データの活用」領域での視点から生徒たちに発問したりした（傾向を読み取りやすいグラフで表せているか等）。

このようにして、普段の授業で身に付けた力が、総合的な学習の時間で地域の方とのミーティングを行う際に役立つなど、探究的な学習を通して自信をつけたことで、主体的に学習に取り組む生徒が増えていった。

4. 調査研究の結果明らかとなった 生徒や教職員の変容

教職員の変容としては、総合的な学習の時間を核としたカリキュラム・マネジメントを推進し、つきたい力を共有することで、それぞれの教科において教科横断的な視点での授業改善が進んだことが挙げられる。

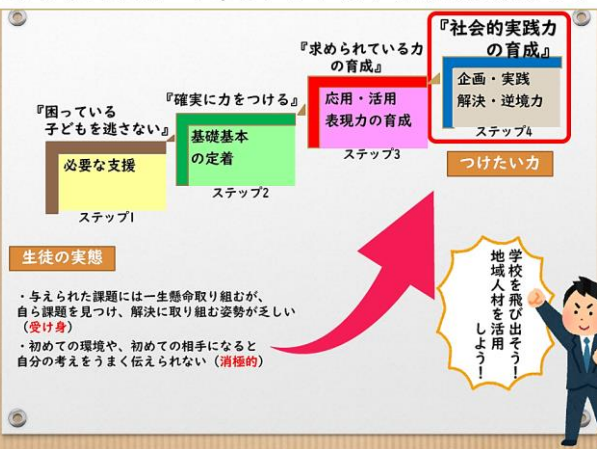
また、子どものアイデアを尊重し、子ども主体の授業づくりを意識するようになったことも大きい。その結果、職員間での情報共有や、授業の展望の相談を積極的にできるようになったり、学年の枠を超え、子どもたちの取組みに対して協力できるようになった。

教職員の姿が変わったことで、生徒も大きく変容した。与えられた課題に取り組むだけでなく、探究的な学習を進めるなかで、主体的に学習に取り組む生徒が増えた。「自分たちが地域のために考えたことが実現する」という成就感から、更なる活動へとつながった。

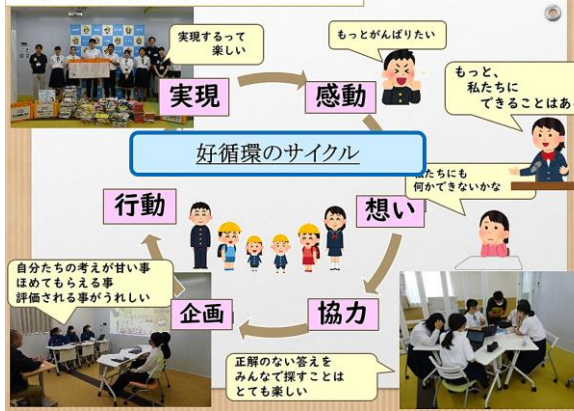
今年度は、教科と教科、教職員・生徒同士、学校と地域というように様々な場面において「つながり」「つながる」ことができた。

令和4年度は、保護者や地域の人々とともにある学校という視点での学校運営をさらに進めていけるよう、カリキュラム・マネジメントの成果や生徒の変容を分析し、全教職員で共有することで、課題改善を図っていききたい。

カリキュラム・マネジメントをすすめるにあたって

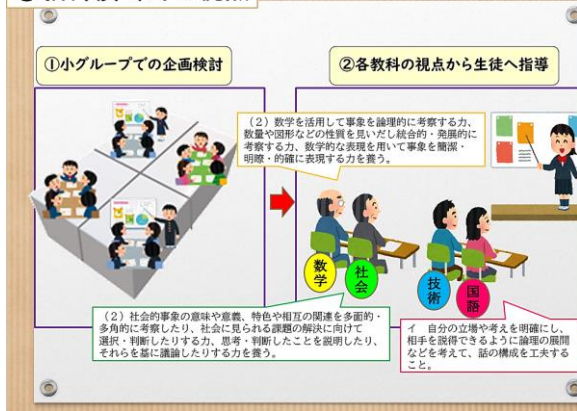


①地域人材の活用について



▲役場と学校の連携には、町教委の指導主事が“かいかし”となった。

②教科横断的な視点



▲生徒プレゼンでは各教科の「見方・考え方」をもとに生徒改善点を伝えた。